

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2016

「今を生きる知性 ～身近な大学～」

第6回 12/8 (木) 13:30～15:00 報告

巨匠たちのマーラー

講師 菅野道雄 (本学教授)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

平成28年度最後の第6回公開講座（受講者22名）が12月8日に開催されました。子ども発達学科教授の菅野道雄先生による「巨匠たちのマーラー」と題された講演は、ナチス支配下のドイツでユダヤ人という理由だけで演奏が禁止されていたマーラー作品について、4人の巨匠指揮者の演奏記録からその時代の「今」を生きた姿、音についてCDの音源を交えながら詳しく紹介されました。

講座開始までの間、12月に相応しいベートーベンの『交響曲第9番』がBGMとして会場に流されていました。第4楽章はオーケストラに合唱が入り『歓喜の歌』として日本でもよく知られています。菅野先生による年末サービスということで会場の雰囲気盛り上げていただきました。

4人の巨匠指揮者について、まずはベートーベンの『交響曲第9番第4楽章』の最終部分だけを聴き、それぞれの特徴的な芸風を比較しました。4人の巨匠指揮者とはブルーノ・ワルター WALTER, Bruno (1876-1962)、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー FURTWÄNGLER, Wilhelm (1886-1954)、ウィレム・メンゲルベルク MENGELBERG, Willem (1871-1951)、カール・シューリヒト SCHURICHT, Carl (1880-1967) です。

ブルーノ・ワルターは楽譜どおりの完璧な演奏です。テンポが遅く感じるのは最初から計画的だったのかもしれませんが。アポロ芸術の代表といわれています。ヴィルヘルム・フルトヴェングラーはレジェンド的巨匠で現代でも大人気です。すさまじい速さで演奏しています。合唱のあとはオーケストラ演奏となり、この部分はまるで自分のもの的な演奏感があります。ウィレム・メンゲルベルクは非常に面白い終わり方をしています。ベートーベンがあえてテンポを速くした最後を自己流テンポで極端に表現したようです。カール・シューリヒトはヴィルヘルム・フルトヴェングラーほどではありませんが、やはり最後はブレーキがかからなくなった感じです。

グスタフ・マーラー MAHLER, Gustav (1860-1911) は、現代音楽の中でもロマン派です。交響曲には歌を取り入れたものが多く11曲が作曲されました。交響曲に歌を入れたのはベートーベンの『交響曲第9番』が初めてでした。ベートーベンが『交響曲第9番』を完成後第10番を完成させることなく亡くなったことが発端となり、マーラーは『交響曲第8番』完成後、次の作品には第九の呪いを避けるためにあえて『大地の歌』という作品名にしました。その後の作品に第9番とつけたところマーラーは死去しました。第九の呪いかどうかは定かではありません。ただ、心身共に不健康であり、自身がユダヤ人であるために演奏停

止という事態になったことを知らずして病没しました。メンデルスゾーンに始まり昨年度の菅野先生の講座で紹介されたシェーンベルクも同じく退廃音楽として演奏停止となりました。4人の巨匠指揮者はいずれもマーラーに魅せられており演奏拒否をしたわけではありませんが、時代背景の強い影響を受け、命の危険にさらされる事件などもあったため、演奏自粛をせざるをえなかったのです。音楽は常に鳴っている音が次々と変わるものであり、まさに「今を生きる」ものです。

今回のテーマに興味を持たれて参加された方々の中には、クラシックについて大変豊富な知識を持っておられ、次年度の講座を希望するお声もたくさんいただきました。

【講座の様子】

